

一人ひとりの想いつたえたい >>> あなたの声でつくる情報誌

NO.61

2006・冬号

まなこ

企画・発行

武蔵野市企画政策室市民活動センター男女共同参画担当



特集 心つなぐ文化をさがして

取材

- 私らしく舞いたい
観世流能楽師 津村 聡子さん
レポーター体験記 馳 令子
- 昔ながらの食が、今の元気に
井野 活子さん
- 「違う」はイケナイ？
Gilbert CHARLE (ジルベール シャルル) さん
- 未来へ オン・ステージ！
RB-SOUL RIE (佐藤理恵) さん

寄稿

- ・ 日本文化論～私と彼の関係
まなこレポーター 小澤 和彦

情報

- ・ 「ライター入門講座」
市民活動センター男女共同参画担当
- ・ 男女共同参画企画 ミネハハ&板倉リサ ライブ



さまざまな国や地域の文化、日本古来の伝統文化や若者たちが夢中になる新しい文化…私たちの生活の中に溶け込んでいるたくさんの文化。それらをただ受け止めるだけでなく、ときには、自分自身の言葉やかたちで表現してみませんか。

きっと、お互いの心の扉を開く鍵を見つけることができるのではないのでしょうか。



自宅のお稽古場で「好きなことをずっと続けられるのは幸せな人生だなと思うのです」

私らしく舞いたい

津村 聡子さん 八幡町

室町時代に大成され、いくたの変遷をみながら今日まで発展し続けた能の世界。本来、男性の芸術といわれる中で女性能楽師の活躍は新たな可能性を感じさせる。観世流能楽師 津村聡子さんもその一人だ。「能の魅力を多くの人に伝えたい。そしてもっと身近に感じてもらいたい」熱い抱負を語ってくれた。

男性のために作られた能

「能は男性が演じることを前提に作られたものですから、女性が演じにくい面はあります。重い装束を付け体力的にきついこともあるし、曲によっては女性が舞台で演じることを許されないものも」。祝い事のはじめに演じられる「翁」の演目では、今でも女性が楽屋へ入室することさえ許されない。能は江戸時代、式楽として幕府に仕え、見るのも演じるのも武家専用の芸能であった。封建社会の影響がそのまま残っている部分がある。

600年以上続く歴史の中で、女性が能を演じるようになってまだ60年ほど。それでも戦前から舞台上に立った女性はいたのだ。

「女による女のための女の能」

平成16年に初めて女性能楽師22人が、重要無形文化財総合指定保持者に選ばれた。従来のイメージにとらわれない、新しい試みも始まっている。「女による女のための女の能」と題した公演が、女性能楽師たちにより平成16年12月から翌年3月にかけて、横浜・新潟・

東京で上演された。歌人、馬場あき子さんが「源氏物語」をもとに書き下ろした新作能「小野浮舟」で、津村さんはシテ（主役）を演じた。画期的だと大いに注目されたが、当の本人は「気負わず私らしく舞うことを心がけました。見た人がそれを面白いと感じていただければ」と。

能の道へ進んだのは

能に魅せられたのは3歳のとき。趣味としてお稽古に通う母親についていって「私もやりたい」そう思った。6歳より稽古を始め、高校生とき、プロになろうと決意する。東京芸術大学邦楽科を卒業後、観世流の坂井音重師のもとで11年間内弟子修行。29歳のとき観世流能楽師準職分に認定され、現在、年に何度かシテとして舞台上で演じる。「能は歌舞両方備わった、とても優れた演劇です。決められた型で舞っても、舞う人によって印象が変わるのです」そんな能の面白さをもっと多くの人に伝えていきたいと、普及活動にも力を入れる。



舞台「小野浮舟」

家庭で、地域で親しまれ

市の主催により昨年、※しよろあん松露庵で謡の入門講座が開かれ、講師を務めた。津村さん自身がそうであったように、肉親または身近な人のお稽古に影響されて習ったことのある人たちが、熱心に通われた。能は家庭の中で、また地域で受け継がれ、広く親しまれてきた。「まったく初めてという方にも是非体験してほしい。言葉で説明するより、実際に体験して初めてわかる面白さがあるから」。中学校へ出張授業に出向いたこともある。「実際に型を演じることに、子どもたちはとても興味を持ったのです」

現代の時間の流れの中で

スピードが求められる現代。趣味や興味の対象も多様化する中で、少なくとも一時間以上ある能をずっと見ていると眠くなってくる。そんな人がいるかもしれない。「ダイジェスト版に縮めて見てもらうなど、能がもつと身近な存在になるような環境作りも、必要かと思えます。でもちよつとつらい時間を通り越えていった先に、ああ面

白い、そう思える瞬間があるのです。現代の時間の流れの中で、是非それを感じてほしい」

先入観や難しい理屈は後回しにして、まずは味わってみる。心豊かな世界に出会えるせつかくのチャンスなのだから。

取材 加藤和子(文)・森 治美

伝統文化の新しい息吹

●取材体験記

まなこレポーター 馳 令子

程よく手入れされた植栽、打ち水された敷石、そんな風雅な気配漂う稽古場の入り口で、津村さんは少女のような笑顔で私たちを迎えてくださいました。能楽師というので厳しい雰囲気年配の女性を想像していた私は、目の前の若い女性がご本人だと気づくのに少しの間が必要でした。

男性中心の伝統芸能の世界で、能楽師の家の生まれでもない女性が、「女性能楽師」として注目され始めた今日まで、さぞや厳しい修行の日々だったと思います。しかし津村さんは「やめようと思ったことは一度もありません」、それは「(能が)好きだから」と穏やかな表情でおっしゃいます。ピンと伸びた背すじ、淀みなく話す一言ひとことに女性能楽師としての誇りと自信が感じられました。

今まで、能は古くさいものと感じていた私ですが、伝統に裏づけされた中に、

現代女性の感性が融合した津村さんの舞台を是非見てみたいと思います。お話を伺ってすっかり津村さんのファンになってしまいました。

木の香りがするような稽古場は、伝統芸能を精進するにふさわしい清々しいたずまいです。私はここで、後世に語り継がれるであろう伝統文化の新しい息吹を感じとった気がして、いつまでも去りがたい思いでした。



レポーター 馳 令子(右)と

※ 武蔵野市立松露庵



- ・市立古瀬公園内(桜堤1-4-22)の一角を占める。
 - ・旧古瀬邸を改修し本格的な茶室として生まれ変わった。市民も利用できる。
- TEL・FAX 0422(36)8350

昔ながらの食が、 今の元気に



井野 活子 さん 吉祥寺本町



「働くことは当たり前！」今年、喜寿を迎え
いっそう活き活きと。

昭和3年、井野活子さんは、千川上水治いの農家に生まれた。武蔵野の土は米作には適していなかったらしく、実家は畑作農家であった。当時は子どもも立派な働き手で独活、芋、麦などの作物の収穫や冬の麦踏みや大人とともに行った。畑仕事のできない日は小麦を臼でひいた。その粉は団子やうどんやゆで饅頭になった。七夕やお盆に作るゆで饅頭は、蒸す饅頭より平たい。しつかり包まないで割れてお湯の中に餡が出てしまう。これは「腹切れ」と言われ、うまく作れるようにならなければ嫁に行けないと言われていた。

昭和24年、物のない時代。小麦粉を持って新宿まで行き、嫁入り道具の和傘や洗い張り用の板と換えてもらった。花嫁衣裳で嫁ぎ先の本町の商家まで歩き、式が終わると髪を結い直し着物を着替え、お祝いに来てくれた人々にうどんをふるまった。うどんのように夫婦が細く長く平穏でありますようにとその晴れの日の夜から忙しい商家の嫁としての日常が始まった。

「母たちを見ていたし、手伝わされていたからそれが当たり前のことだったね」実家では、女たちが畑仕事の合間、家事以外にも収穫したゴマや豆をさやから取り出す作業など休む暇なく働いた。祭りなどで出かける日も、家族の食事の支度はしておかなければならなかった。お昼までかかってうどんや饅頭や五目飯を作っていた。

取材 尾花雅子

未来へ オン・ステージ!

ラブ ソウル
RB-SOUL
リエ
RIE(佐藤理恵)さん



「子どもたちにダンスを通してさまざまな人とふれあい、たくさんの方のことを学んでほしい」

ステージ狭しと手足を広げて飛び跳ね、ステップ! 10数人で息を合わせ、またソロで、大人顔負けに曲にノる。衣装はダボダボボンや揃いのTシャツ・帽子ときには創作コスチューム。アメリカの黒人文化から生まれたヒップホップダンスを踊る5歳から小学生の子どもたちは、ダンスサークルRB-SOULのメンバーだ。

「ヒップホップって何?」と初めは首をかしげた子どもも「体と心をリズムにノせる楽しさ」には、はまる。練習を重ね、舞台を経て得る達成感と自信。けれど舞台は踊り手だけでは成り立たない。衣装作りなど協力を惜しまない保護者やスタッフへの感謝。観客に楽しんでほしいという意識の芽生え。引つ込み思案な子が大きな声であいさつするようになり、年齢差のある集団の中で年下の子を自然に面倒見る。そんな成長を目の当たりにした保護者が「私もダンス、できるかな?」。今では母親たちや中高生も仲間だ。

吉祥寺のカフェで



「違う」はイケナイ?

ジルベール シャルル

Gilbert CHARLE さん 西久保

西久保の自宅から自転車で一本道、シャルルさんは、週末を吉祥寺で過ごすのが気に入っている。店の移り変わりが速くて新鮮な感じがするし、若い人が多いのも好きだから。

有名ブランドのパリ本店から日本支店へ、希望来日は20年前パリに留学してきた日本人女性の「日本語教えます」のピラを見て連絡し、運命の出会いとなった彼女(現夫人)が帰国した頃と重なる。日本で再会し現在17歳になる一人息子が誕生。それを機に「パリ16区に似ておしやれ」な代官山から「安全で緑が多くてパリの17、18区に似ている武蔵野」に越してきた。

アジアに興味があったの来日だったが当時驚いたことは多い。フランスにない食事や行事は一つひとつ真似することで馴染んでいったが仕事上では戸惑った。定時前から退社準備するのが当然のフランスに、残業

はめつたにない。なぜ毎日残業させられるのか?異国人だからか?悩みは同僚の一言でふっきれた「日本では皆がフツーにすること」。若い人はなぜ(文化が)違うから嫌だと言う?違うはイケナイ?違うから行ってみる。違うからやってみるね」この前向きさが異文化に馴染むコツかもしれない。

それでも馴染めないものはある。父親の姿が少ないPTA、息子の病気で仕事を休む彼に「なぜ君が休むのか」と不思議がる上司。フランスでは子育ては夫婦がフイフティーフイフティーだ。「子どもとの時間は大切です」。休暇も定時退社後も、時間はずべて子どもや大切な人とのために使いたいのがフランス流。

そんな彼が一時フランスに戻って仕事をし、ガードマンに怒鳴られた「何やっている?仕事は6時まで。6時前から片付けろ」。肩をすくめて笑った「私いつの間にか半分日本人ね」

取材 福井貴美子(文)

森治美

サークルの指導者RIEさんもそんなメンバーに親子愛の素晴らしさを思う。仕事のストレス解消に始めたジャズダンスで奥深さに衝撃を受け、本場ロサンゼルスへ修行に出てプールの道へ。それを理解し応援してくれた母。母のためにも、ダンスの世界を覚えてくれた尊敬する師匠のためにも、ダンサーとして指導者として結果を残そうと決意し、今に至る。去年は地域の祭や市民文化祭に出演し、体も五感もフル回転でダンスの楽しさを表した子どもたち。高齢者施設への慰問で、車いすから懸命に拍手し涙ぐんだお年寄りの方々の姿。ダンスの真髄はただ音楽にノッて踊る自己満足ではない。

「技術・基礎知識・精神力の大切さを伝えたい、そしてダンスを文化としてもっと高めてほしい」と元気な子どもたちに未来を託す。

取材 藤井美里

「LAダンスコンペティション」でジュニアの部入賞・振付賞も受賞した作品を、昨秋のけやきダンスフェスティバルで再演





首からIDカードを青いストラップでぶら下げて、ビルの入り口から早足で駆けてくる茶髪の彼。歳は27、8ぐらいに見えるがどうだろうか。私はすでにエレベータに乗り込んでおり、「閉」のボタンを容赦なく押す。扉がゆっくりと閉まり、やがて彼が見えなくなった。

私は、本来このような意地悪な人間ではない。むしろ、自分が先にエレベータに乗り込んだとき、かなり遠くにエレベータに向かってくる人がいても「開」のボタンを押しながらかじっと待つタイプの人間なのだ。今回、このような非情の措置を下したのは理由がある。私の職場のフロアとは別のフロアにIT関係の会社が入ったようなのであるが、その職場の人たちときたら、私がエレベータを押して待たせても「すみません」の一言もなく当然のように乗り込み、大勢のときはガヤガヤ騒ぐし、一人のときは、携帯をひたすらいじっている。

日本には、「謙譲の美德」とか「気遣い」という優れた伝統文化があったはずなのに、この人たちは一体どうなっているのか。別に「すみません」「ありがとう」なんて言わなくても生活に支障はないだろうし、ある意味無駄なのかもしれない。「文化」とは、なくても生きていけるけれども、あると人間に潤いをもたらすようなものを指す言葉なのではないだろうか。ちよつとした挨拶、気遣い、受け取る人の好みを考えて選ぶお歳暮、一年の出来事を報告する年賀状、これらはすばらしい文化だと思うし、私の田舎では、生活の一部として浸み渡っている。私はこれらが続けていくつもりだし、子どもにも伝えていきたい。

あと2か月くらいしたら、IT会社の彼をエレベータで待たせてみることを再開しよう。もし、挨拶ができなかったら、今度は……。こんな具合に文化教育運動推進中。

まなこ61号アンケートから

『まなこ』のアンケートはレポーターを中心にお願いしています
(レポーターは毎年3月に募集)

Q1 日常生活の中で心がけていることや、こだわりは？

- ・日本語の美しい響きや言い回しの奥ゆかしさ
- ・日常生活の中で親から教えられたこと。敷居を踏まない、夜爪を切らない、食べ合わせなど
- ・人生の先輩に言われたことには耳を傾ける。
- ・自分の考えを人に押し付けないように気をつけている。
- ・何事も最初から否定しない。
- ・季節を感じる毎日を送る。
- ・箸の上げ下げやお辞儀の仕方など、食事の作法や日本間での礼儀
- ・家族の行事（誕生日、記念日など）は皆で祝う。
- ・流行にとらわれないライフスタイル

Q2 風俗・習慣・言葉・価値観の違いに驚いたり、新しい発見をした体験は？

- ・「考えておきます」も所によっては断りの言葉。地方によって同じ言葉でも意味合いが異なる。
- ・男性語、女性語が依然としてまだ意識されていることに驚く。
- ・都心から武蔵野に来て、同じ都内なのに歩いて芋掘りに行かれることに驚いた。
- ・人柄にもその地域独特の雰囲気があると感じる。
- ・イギリスでは、景観美をととても大切にし、野生生物にも寛容な国民性が印象的だった。
- ・アメリカで、スマイルやウィンクなど言葉でなく表情で会話するノウハウは、日本人にはなかなかマネできないと感じた。
- ・インドでは浄・不浄の文化やカーストから来る考えから、誰が使ったのが分からない丈夫な食器より、一回きりの使い捨ての食器が高級。食べ残しは、その辺に棄てておけば、野良牛がきて食べてくれるという話を聞いてとても面白いと思った。

■ ライター入門講座

「楽しく書ける文章術」



自分の伝えたいことを楽しく書いてみませんか。
この講座で書くことが苦手から楽しみに変わります。
きめ細かい添削で指導していただきます。

日 時：平成18年2月6日・13日・20日・27日

(すべて月曜日4回) 午前10時～正午

場 所：むさしのヒューマン・ネットワークセンター会議室

講 師：西村良平氏

(日本エディタースクール講師・実践女子短大講師)

定 員：20名(市内在住・在勤・在学者)申込み順
保育5名(1歳以上学齢前)

費 用：無料

内 容：第1回 記事の文章を書いてみよう

第2回 わかる文章を書く

第3回 読まれる文章を書く

第4回 自分ならではの文章を書く

(内容については若干の変更があるかもしれません)

申込み：往復ハガキで(記入例参照)

ハガキの記入例

- ① ライター入門講座
- ② 住所
- ③ 氏名(ふりがな)
- ④ 年齢
- ⑤ 性別
- ⑥ 電話番号
- ⑦ この講座で勉強したいことや希望について(100字程度)

※講座内容に要望を反映させたいので、必ず記入してください。

〈保育希望の場合〉

- ⑧ 子どもの氏名(ふりがな)
- ⑨ 子どもの生年月日
- ⑩ 子どもの性別

■ 男女共同参画企画

ミネハハ&板倉リサ 歌と舞の競演

～スピリチュアルライブ～

日 時：平成18年2月5日(日) 午後3時～4時10分

場 所：吉祥寺シアター劇場(吉祥寺本町1-33-22)

(吉祥寺駅北口から徒歩5分)

内 容：3,000曲以上のCMソングを歌い活躍されている“ミネハハ”さんと、ミュージカル女優として活動されている板倉リサさんとの競演です。ミネハハさんの歌とお話、ミネハハさんの歌に板倉さんのダンスがジョイントします。平成17年5月にオープンしたばかりの吉祥寺シアターで心地よい時間を過ごしませんか。

定 員：197名

保育10名(1歳以上学齢前)

費 用：無料

申込み：詳しくは1月15日号の市報をご覧ください。



ミネハハさん



板倉リサさん

往復ハガキ(記入例参照)で、または返信用ハガキを持って、1月20日(金)までに市民活動センター(市役所6階)へ。なお定員に満たない場合は、締め切り後も受け付けます。お問合せください。

Q3

味・言葉・伝統・風習など、次世代に伝えていきたいと思うものは？

- ・ 四季の移り変わりの中で生まれた風習とその由来
 - ・ お歳暮・年賀状・お雛さま・鯉のぼり・菖蒲湯
 - ・ 七五三・ゆず湯・お彼岸・初詣・お目見 など
- ・ 方言
 - その土地の歴史や文化・習慣などが長い年月をかけて練りあわされたものなので、大切に伝えていってほしい。
- ・ 着物
- ・ 醤油や味噌を基本とする日本食の文化、乾物、漬物、煮物など

- ・ 緑豊かな武蔵野
- ・ ムーバスで自然に席を譲ったり、立っている人の荷物を心配している人たちを見て、周りの人にも気を配る心の余裕を持ちたいと思った。
- ・ 伝えるにはまずは自分が日本や武蔵野の文化を勉強しなくては。
- ・ お正月の過ごし方とおせち料理。おいしいものが簡単に手に入る世の中だからこそ、年始ぐらい心を込めたお手製が賢いと思う。

*このほかにもたくさんのご意見をいただきました。ありがとうございました。

レポーター会議風景 10月11日(火) 10:00~12:00
市役所第605会議室にて



● 60号「時間(とき)は私のパートナー」について

- ・テンミリオンハウスは乳幼児向けの「あおば」を除きほとんどが高齢者向けだが、「花時計」は異世代間の交流を大切にしている。
- ・最近の若者は、すごく忙しいか、すごく暇かどちらか。いろいろなことに取り組みアルバイトまでしている人の話を読んで、いいなあと思った。
- ・「時間」は皆に平等に与えられているが、使い方によって無駄にも有意義にもなるとよくわかった。

● 61号のテーマ「文化」に関連して

- ・電車の沿線文化が話題にはなるが、最近あまり違いを感じなくなったように思う。
- ・生まれてからずっと東京にいるのでほかと比べることができず、東京らしさって何なのかわからない。
- ・ゲームや遊具で育っている子どもたちは、自然がいっぱいの地方へ行っても遊び方がわからないようだ。
- ・自分は東京で生まれ育ったので、なるべく田舎のある人と結婚したいと思っていた。
- ・武蔵境駅が高架になり北と南が行き来できるようになったら、どのように発展していくか楽しみ。
- ・都心から中央線に乗っていてちょっと山が見えてくると「帰ってきたんだなあ」と思う。
- ・日本では、つまらない内容だったら話さないほうがましとられるのに、外国では、内容よりも自分をアピールするのがよいと考えられている。
- ・自分が忙しいときは、話しかけられるのが面倒でスーパーで買い物していたが、時間に余裕ができたなら、人情味あふれる個人商店へ行くようになった。

▶ 平成17年度の『まなこ』は、ともに生きるための手がかりについて考えてきました。締めくくりとなる次号では、あらためて「人と人とのつながり」をテーマに取り上げたいと思います。



今回のテーマに関する本を、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの蔵書の中から

● ハイライトで読む 美しい日本人

齋藤 孝 著 文芸春秋



本書のテーマはずばり「日本人」です。日本人が元来もっていたハイレベルな文化的特性というものを、質の高い日本人論、日本文化論の中から抽出したものです。著者が最も重要視しているのは、長い間、日本人の生きる活動を根底で支えている原動力はどこにあったのだろうか、ということ。それを多くの優れた基本文献から引用し、一番おもしろいところをハイライトで読めるように工夫してあります。テキストのルビもかなり多く、小学校高学年からでも読めるようになっています。日本人は、こんな得意技の持ち主なのだと思いつながります。

● 室礼

山本 三千子 著 叢文社



「室礼」と書いて「しつらい」と読むのをご存知でしたか？ 身近に私たちの暮らしに溶け込んでいる、伝統的な日本の文化として「お正月」「節分」「雑祭」「端午の節句」「七夕」「お月見」「七五三」など、四季折々の美しい習慣があります。これらの年中行事も、実は先人が作り上げた生活文化の一つです。

本書では、この7つの年中行事を取り上げ、日本の精神文化の「いわれ」と「ところ」を「形」にしたもの、それが「室礼」である、と美しい写真とともにわかりやすく書かれています。心豊かになる1冊です。

武蔵野市境2-10-27 武蔵野市政センター2階 TEL・FAX 0422(37)3410
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp URL http://www.clipcraft.or.jp/m_hnc

STAFF

- レポーター 上野敏子・大八木俊子
小澤和彦・杉浦定子
寺田美都・戸田真帆子
馳 令子
- 取材・編集 森 治美(編集長)
尾花雅子・加藤和子
福井貴美子・藤井美里
星 詩子・松田理恵
- ☆他にもたくさんさんのアンケート協力員、編集協力員に支えていただいています。
- レイアウト 小井戸厚子
イラスト 本田 倫
印刷 社会福祉法人 東京コロニー

- ★母の若いころは寝る時間を削って働いた。今は眠っている間にご飯が炊け、洗濯が終わる。家電品が我が家一番の働き者。(尾花)
- ★市民が利用できるお茶室、松露庵のご存知でした？武蔵野に伝わっていたゆで饅頭も是非味わってみたい。(加藤)
- ★パリにはない年越しそばを食べ、正月はめで鯛、よる昆布と語呂合わせの縁起かつぎを身近に感じる私は日本人。(福井)
- ★皮も中身も夫が作り家族で包む餃子、義母直伝で子どもも私も大好物・大満足。秘伝のスパイスは「思い出」？ (藤井)
- ★市内には神無月にお供えをしたり、8月1日がお盆の家もあると聞いた。武蔵野のこと、もつともつと知りたい。(星)
- ★幼い息子にとつて、親は最も身近な文化変な「文化人」にさせぬよう、襟を正して一年過ごせたらいいのだけれど。(松田)
- ★すばらしきかな、武蔵野人たち。今年も『まなこ』の誌面を通じ、たくさんのおすてきな出会いが生まれますように。(森)

編集後記

★母の若いころは寝る時間を削って働いた。今は眠っている間にご飯が炊け、洗濯が終わる。家電品が我が家一番の働き者。(尾花)